

吉野ヶ里

山田真砂年

黄葉踏みゆけばいつしか紅葉踏み

初鴨の尻振りをればなつかしき

実葛邪心といふものつやつやす

枯葉鳴らす風の大らか吉野ヶ里

城柵を出でて墳墓へ枯野道

甕棺の広さや冬のうららかに

案内板に漢語ハングル冬うらら

英彦山神社 二句

神前に小春日の身を二つ折り

お社の裏手に武蔵鎧の実

都府楼の百の礎石に時雨かな

かしこみかしこみ退屈に泣く七五三

老いも楽し天満宮に冬紅葉

冬の蠅ガラスきれいに磨かれて

暖房の音あり漢書横積みに

鉞力屋の硝子に冬日屈折す

着ぶくれし婆の撒きをる鳩の餌

すれ違ふとき風のあり社会鍋

城跡や冬のたんぼぼ這ふやうに

ゑのころの枯れて身軽や風を呼ぶ

ぬくぬくと陽をけぶらせて枯木山

冬木立風は自在に行き交へり

小春日のなんと嬉しき小諸かな

野晒しのごとし日陰の花八つ手

晴れ渡るミナトミライや冬木の芽

真青な空の底なり枯木山